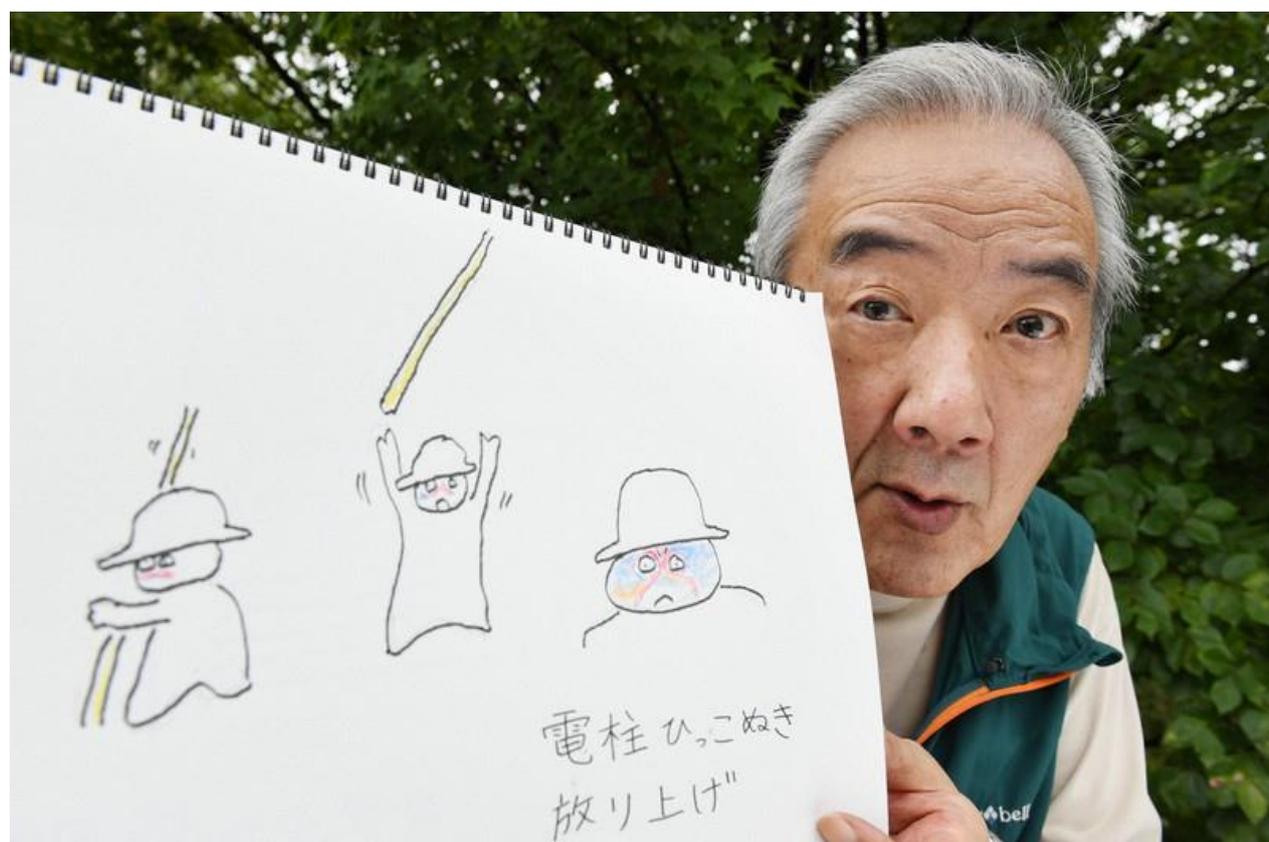


認知症幻視 面白いじゃん

「偏見なく支え合う社会」願い

テレビ東京アメリカ・元社長のテレビマン

毎日新聞 2022/10/16



電柱を放り上げる子どもの幻視を描いたスケッチブックを手にするレビー小体型認知症の 貫田直義さん＝東京都千代田区で2022年9月1日、内藤絵美撮影

テレビ東京アメリカで社長を務めた貫田直義（ぬきたただよし）さん（74）がレビー小体型認知症の影響で現れた幻視をイラストにして紹介している。体調悪化で一時は起き上がることも難しかったが、現在は住まいのある東京都世田谷区で認知症施策の評価委員を担うまで回復した。講演に呼ばれて体験を話す機会も増えており「誰でも当たり前前に認知症になる時代。普通にあっけらかんと受け止めてほしい」と伝えている。

9月下旬、貫田さんの姿は全国の認知症施策担当者らが参加したオンラインセミナーにあった。電柱を引っっこ抜いて放り上げる子ども、動き出すゴルフバッグの模様、先頭がヘビになった白い柵……。当事者の立場で、描いた幻視のイラストを次々に紹介していく。



レビー小体型認知症の貴田直義さんが描いた幻視の絵。ソファからゴリラ が浮かび上がった＝東京都千代田区で2022年9月1日、内藤絵美撮影

ソファのしわから浮かび上がってくるゴリラは、半年間ほど頻繁に姿を現したペットのような存在で、孫の手でたたくと消えるという。幻視は恐ろしいものにとらえられがちだが、貴田さんは「かみつくわけでもないし怖いものではない。面白いじゃんってとらえたほうが」と語る。

貴田さんはテレ東で報道デスクなどを担当。プロデューサー時代は「少子長命時代」といった番組も手がけた。70歳で退社後、頭がフラフラする異変があり、レビー小体型認知症の特徴的な症状とされる幻視が現れた。不眠や食欲不振、便秘、歩行難といった状態にも陥り、体重は80キロから65キロに落ちた。

深刻な睡眠障害が続いた時期に体験した、夢と現実が入り交じた世界は「鬼滅の刃」のようだったと振り返る。この人気アニメには主人公たちが鬼の術にかかって夢の中に閉じ込められる戦いがある。貴田さんはある時は名古屋のかっぼうで3人を相手に格闘し、倒されて頭を打った。これは夢の中で起きていた内容で、家族の話によると、実際はベッドからトイレに行って転び、鏡を割ってけがをした。

復調のきっかけになった出来事がある。看護小規模多機能（通称・かんたき）の介護保険サービスを提供する施設に通い、スタッフの献身的な姿を目の当たりにした。「スプーンに

のせた命の糧となるご飯粒をおばあさんの口に運ぶんだな。おばあさんも懸命に飲み込む。真剣な2人の全人格をかけたようなキャッチボールを見た瞬間、心を打たれて僕の中で何かが変わった」

貫田さんは「かんたき」などのサポートを受け、飲み込みや歯の状態をみながら食事を調整し、排便コントロールもして体力を取り戻していった。「レビーは全身病なんだよ。体中に障害が出てモグラたたきみたい」と語るものの、医師が驚く回復ぶりをみせた。

診断後は、認知症になったよ、と知り合いに電話で伝えたという。超高齢社会では認知症はありふれたものになる。そんな時代の到来を踏まえて「日本の常識なんだから、認知症であることは最初から『解禁』でいくぞって。普通にあっけらかんと対応してもらいたい」と語る。



レビー小体型認知症の貫田直義さんが描いた幻視の絵。子どもが電柱を引っっこ抜いて放り上げている＝東京都千代田区で2022年9月1日、内藤絵美撮影

社会に残る古い認知症観を感じることも。例えば、行方不明になった認知症の人を捜すネットワークの名前に「はいかい（徘徊）」という言葉が使われていた。「認知症の人は何も分からなくなってどこかへ行っちゃうわけではなく、それぞれに明確な目標や意思がある」と貫田さん。求めるのは偏見や誤解がなく、互いに支え合っていける社会だ。

自分が暮らす地域では「かんたき」や店をはじめ、さまざまな人たちが応援してくれている。講演をすればお礼の感想文も届く。思えば、認知症にならなければこんなにたくさんの人たちと巡り合うことはなかった。貫田さんはこうした人生の広がりを「認知症になって正解」と表現し、「絶望する人もいるけど悪いことばかりじゃないよ」と話している。

【銭場裕司】

レビー小体型認知症

認知症の一種で脳の神経細胞などに「レビー小体」と呼ばれる物質がたまって起きる。幻視のほか、パーキンソン症状や自律神経症状などが表れることもある。認知症の種類の中では、記憶障害が特徴的なアルツハイマー型に次いで多いとされている。